

おいせのかっぱ伝説

表題と写真は中日新聞 3 月 22 日「街道ものがたり」である。名駅から南西方向に 500 メートルほど歩くと、かっぱの銅像が二体立っている。なぜ、おいせのかっぱなのか。

名古屋市を南北に走る筏瀬（おいせ）通りがある。通り途中のかっぱの銅像は、1999 年に建てられた。「筏瀬川」と呼ばれる川が通り沿いに流れていた時代の「かっぱ伝説」にもとづく。この地域で伝えられてきた伝説の内容はこうだ。川には昔、子ども好きな一匹のかっぱがすんでいた。ある日、川でおぼれていた子どもを見つけたかっぱが、男の子に変身し命を救った。それ以降、地域の人たちから「人助けのかっぱ」として親しまれた。

「筏瀬川」は庄内川に水源をもち、現在の中川運河につながる。中川運河は昭和 5 年(1930)に筏瀬川と中川を改修して完成した。明治 44 年(1911)に精進川を改修して運河となった新堀川とともに、中川運河は水上交通手段として重要な役割を果たした。これら運河の沿岸は、工場や倉庫などに用途転換され、近代名古屋の産業発展を支えた。

じつは昨春、筏瀬通り付近を歩いたことがある。名駅界限の下町情緒を感じるまち歩きであり、かっぱ伝説も聞いたことがあった。今回「街道ものがたり」を読み、昔ながらの下町を思い起こした。前にレポートしたが、このあたりは遠い昔の思い出と重なる。かっぱの銅像のすぐ近くに、「鉄道病院」（現在の JR セントラル病院）があり、幼き頃母に連れられ病院に通った。かすかな記憶ではあるが、千種本町から名駅に出て、闇市のような所を抜け「鉄道病院」に行った。いまは亡き母に感謝したい。

筏瀬通りから名駅寄りのところに、「ボウシ館イシダ」という専門店がある。10 数年前から、ここで愛用の帽子を買っている。私の頭は小さい頃から大きく、「頭でっかち」と呼ばれていた。「頭でっかち」のわりには中身はないようだが。この頭に関連して、伝説めいた話がある。千種本町の鉄道官舎 2 階に住んでいたが、頭が重いのか、幼き頃に下に落ちたという。通りかかった人に抱きかかえられ、傷もせずすんだと、母からよく聞かされた。かっぱではなく、まさに「あきら伝説」である。

伝説ではなく事実として、普通サイズの帽子ではだめで、「5L」という最大サイズでないと頭に入らない。たまたま、このお店で「5L」帽子を手に入れることができ、それから年中通して愛用している。先日、店の主人と話していて、「鉄道病院」のことを話したら、昔のまちの様子を語ってくれて懐かしかった。かっぱ伝説とともに、病院通いした自分の遠い過去を振り返ることができた。



(2015 年 3 月 27 日)